学習院大学
国際交流センター
Centre for International Exchange

News Letter

vol.14
October 1, 2004

平成17年度
協定留学プログラム派遣学生の募集

**協定留学プログラムによる
派遣学生の募集方法が変わりました！**

これまで、協定留学プログラムによる派遣学生の募集は年１回のみでしたが、2005年（平成17年）度の募集より、派遣先別に、年２回行われることになりました。協定留学プログラムによる留学を考えている皆さんは、この点に十分注意して、計画を立ててください。詳細は国際交流センターまでお問い合わせください。

第１グループである、韓国、タイおよびオーストラリア、ニュージーランドへの派遣学生の募集はすでに終了しました。現在は、第２グループである、その他の国や地域（中国、アメリカ、ヨーロッパ等）への派遣学生を募集しています。募集要項は国際交流センターで配布中です。

平成16年度協定留学プログラム派遣学生

●復旦大学（中国）
政治学科４年　中　亜由美
日本語日本文学科４年　吉野　まや
人文研（哲学専攻）博士後期課程２年　村田　隆志

●チュラロンコン大学（タイ）
経済学科４年　藤田　知恵美

●オーストラリア国立大学（オーストラリア）
英米文学科４年　三重野　利恵
英米文学科３年　有隅　尚子

●ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）
政治学科３年　鈴木　香緒里

●ノースカロライナ州立大学シャーロット校（アメリカ）
政治学科３年　藤原　茜

●イースト・アングリア大学（イギリス）
法学科３年　田中　美紀子
政治学科３年　竹村　彩

●ヨーク大学（イギリス）
日本語日本文学科３年　美尾　由乃

●バイロイト大学（ドイツ）
法学科３年　岩崎　康郎

●マンハイム大学（ドイツ）
ドイツ文学科２年　若林　百合

●国立ナポリ東洋大学（イタリア）
人文研（史学専攻）博士前期課程２年　庄田　宙絵

アジア留学特集！

本学では毎年30名前後の学生が留学しています。
過去5年間の留学先を地域別に見ると、ヨーロッパ（含アフリカ）が52.8%で最
近年、アジアに対する日本人の関心は急速に高まりつつありますが、
国際交流センターでも、アジア地域の協定校との交流に力を入れています。今

中国留学体験記

平成13年度復旦大学派遣学生
平成16年3月経済学部経営学科卒業
丸山　玲子

▲カシュガルからウルムチに向かう車中にて（左端が丸山さん）

上海市の中心部から、バスでおよそ45分のところに位置する復旦大学のキャンパスは、赤レンガの近代的な建物のほかに、グレーの壁に黒い瓦屋根の中国の伝統的な建物もあり、それが緑色の芝生と美しいコントラストをなしています。

太陽が上りかけた朝7時半頃は、キャンパス付近の往来が一番多くなる時間です。近くの市場では、もくもくと湯気を上げた中華まんや胡麻団子が売られ、朝の体操を終えたとおぼしき老夫婦が野菜と共にそれらを買っていきます。一方キャンパス内の食堂では、朝ご飯を買い求める学生たちが列をなし、ドウジャン（豆乳の一種）、ロウビン（肉の餡をいれた、円盤状の揚げパン）などを買っています。

私が留学した復旦大学国際文化交流学院は、世界各国からの留学生が一緒になって中国語を勉強します。使用言語はもちろんすべて中国語です。と言っても、すべての人が流暢な中国語を話しているわけではなく、日本人は母音を強調し、イタリア人はイントネーションを無視し、アメリカ人は得意の巻き舌を駆使するなど、みんなそれぞれ、母国語訛のある中国語を話して、意思疎通を図っています。

多くの人が欧米への留学を希望する中、私は中国を留学先に選びました。その理由は二つあります。

一つは、中国の伝統文化に興味を持っていたからです。酒に酔ってヘベレケになりながら月を詠んだ李白、天界で仙女にいたずらしたために豚にされた猪八戒、「なるようにしかならない」と、妙になぐさめられる無為自然を説く道教。これらユニークな文化を生み出した中国人に交じって生活したい、もっと中国文化を知りたい。そう思ったのが、留学の動機でした。

もう一つは、経営学を専攻している学生にとって、将来世界経済の重要なポジションを占めるであろう中国経済を知ることは、重要なことだと思ったからです。ユニクロの生産方式に代表されるように、今や日本の製造業は中国抜きには語ることはできません。しかし、学校の授業やテレビ・雑誌等の特集では、日本企業にとっての中国の役割は取り上げても、中国経済そのものには十分言及していないように思っていました。だから私は、中国に留学して中国経済や企業環境を調べたいと思ったのです。

韓国留学体験記

平成16年度慶北大学校派遣学生
人文科学研究科日本語・日本文学専攻博士前期課程2年
石塚　健

私が韓国に留学することになった契機はかなり受動的なものだった。私の所属する日本語・日本文学科では韓国テグにある慶北大学校との間に協定があり、研修旅行の際に慶北の先生から私の指導教授に韓国に関心のある学生の留学についての提案があったことがきっかけであった。

私は韓国語を勉強はしていたが、自分では趣味の範囲であったので、実際に留学することになったときは、楽しみよりもまず不安が脳裏をよぎった。

しかし、ある時、指導教授から「たとえ一年間でも外国で暮らすということ、それだけでも自分の糧になる」と言われた。その時にはただなるほどと思ったが、実際に留学して帰ってきたら、その言葉が本物であったことに気づいた。

留学が始まり、韓国での生活が始まった時、私は正直言って愕然とした。韓国語が全くと言っていいほど、わからなかったからである。もちろん、教科書で勉強した韓国語と実際の韓国語とは違うということはわかっていたが、こうまで全く理解できないのが非常にもどかしかった。韓国で生活しながら、韓国人と日本語で話すということは私にとってとてもつらいものだった。

しかし、いつまでもくよくよ悩んでいるわけにはいかなかったので、自分で韓国語習得の目標をたてた。まず、とりあえず2カ月、長くても3カ月間は日本語を使ってしまうことをよしとしようと決めた。話す時は日本語でも、まわりで話されている韓国語に聞き耳を立てて、実際の韓国語のリズム、速さ、会話での言いまわしに慣れようと思った。それらに慣れてくると、今まで人間が話す速度ではないと思ってしまっていた韓国語の速度にもだんだん慣れてきた。3カ月を過ぎてからは、よく使われる方言にも気を配るようにした。

けれども、それだけではやはり十分ではなかった。韓国語の勉強で一番役に立ったのはやはり韓国人の彼女ができたことではないかと思う。電話、メール、会話、手紙、友達言葉、流行の言葉など教科書やテープでは学ぶことの出来ない言語活動を実践することができた。なにせ、失敗や喧嘩のときの言い訳も韓国語でしなければいけないのだから、一日中頭の中が韓国語にならざるをえない。よく現地で恋人を作ると、語学は上達するといわれるが、それが正しいことだということを肌で感じた。

日本語教育の面では様々なことを体験することができた。慶北大学校の語学教育院での授業、韓国人向け日本語教科書のテープ吹き込み、日本語の個人レッスン、論文のネイティブチェック、教科書の翻訳など価値ある体験ができた。

韓国に行って、良くも悪くも私が一番肌で感じたことは、人間関係の濃さではないかと思う。韓国人すべてがそういうわけではないが、概して韓国人同士の人間関係は日本人に比べて濃いという印象があった。一人のプライバシーというか個人領域を一つの円と考えると、日本人はそれぞれ境界が接していて、相手側には入ってこないのに対し、韓国人の場合は、円の何割かが相手の領域にまで入ってくる。

韓国人は必ずと言っていいほどに1人ではご飯を食べないということも、驚きの一つであった。韓国の人々は1人で食事をすることを避けようとする。中には、病的にそれを嫌う人までいて、一緒に食べる友達がいなければ、食事は抜くほうがましという意見を持った人が少なからずいた。

留学が終わって、自分は一年間どのようなことを勉強し、何を身につけたかとい

実際に現地で生活することで、中国の新たな側面を見ることができたことは、大きな収穫の一つでした。もし留学をしていなかったら、私は間違ったイメージを中国に対し抱き続けていただろうと思います。例えば、貧富の差が想像以上に広がっていたことは、留学前のイメージと大きく異なっていたため、特に印象に残りました。私が留学した頃は、多くの日本のメディアが「中国の経済発展はめざましく、人々の暮らしは日本のバブル期のころを思わせる」というようなことを伝えていました。しかし、近代都市と言われている上海ですら、一日中道端で「電気工事承ります」と書いた札を立て、いつ来るかわからない客をひたすら待つ若者や、ボロを身にまとって子供と共にお金を無心する親子が大勢いたのです。私はこの留学によって、物事の表面的な部分だけでなく、その裏に隠された事実をつかむことの大切さに気付きました。

実は、私はこの秋から中国の大学院に進学します。帰国後、就職活動もしましたが、自分が何をやりたいのか考えた時、必ず頭に浮かんだのが、中国留学で初めて目の当たりにした経済発展途上国の姿だったのです。なぜ、経済が発展しているのに、彼らは貧しいままなのか。彼らの生活を豊かで幸せなものにしたい。そう考えて選んだのが、経済のメカニズムを研究する道でした。私は幸い、中国政府から奨学金を得ることができました。今後は研究に真摯に取り組み、将来は世界経済の発展に尽力したいと思っています。

留学は、それなりにリスクのあるものです。しかし、もし留学しようか迷われているなら、私は自信を持って、留学することをお勧めします。留学で得るものは、それらのリスクを埋め合わせても、まだ余りあるものだと確信しているからです。

最後になりましたが、中国留学という貴重な機会を下さった学習院大学に、心より感謝いたします。

も多く、次いで北米23.9%、アジア14.4%、オセアニア8.9%となっています。

今回は、アジア留学に焦点をあててみました。

うことを聞かれても、うまく答える自信がない。それは何も得なかったというのではなく、得たものが多すぎてわからないのである。しかし、一つ自分の習慣になったことがある。これは留学が終わり、日本に帰ってきて、日本での生活がまた始まってからも継続して考えてしまうことなのであるが、常に「日本とはどういう国なのか」、「日本語はどういう言語なのか」という問いを頭の中で繰り返している。外国で生活をすると、自分はその国では外国人であり、嫌でも人からは日本人の代表のように見られる場合が数多くある。韓国人からよく日本・日本語についてもよく聞かれた。韓国人だけではなく、同じ寮にいる他の外国人にも聞かれる。それに答えるためにはどうしても日本・日本語を自分でよく考えなければならず、しかも客観的に考えなければならない。一年間の留学を通して一番「身についた」ことは「日本・日本語」を今まで以上に深く考える習慣ができたことであるかもしれない。

韓国で得たもの、勉強したものを一つ一つ文章として表現することは難しいが、自分の肌に染み込んだ物をこれからの人生に役立てていきたいと思う。私は将来日本語の教師を目指している。日本語教師になるための韓国留学というのは他の人には体験のできない、貴重なものであったと思うし、自分にはこの上のない宝物になったと信じている。今後は、その貴重な宝物を実践の場で生かすことができるように一層の努力を積み重ねていきたい。

◀ 済州島にて友人と（左側が石塚さん）

タイ留学体験記

平成16年度チュラロンコン大学派遣学生
経済学部経済学科4年
藤田　知恵美

▲クラスメートと（右端が藤田さん）

一年生の終わりに、経済学部の川嶋辰彦先生の研究室内にあるボランティアプログラムに参加し、一ヶ月間タイの山奥で現地の学生とともに活動した。都市と農村に格差があること、確かな階層がタイにはあること。観光では決して見られなかったタイの社会を見た以上、ただの経験として終わらせるのではなく、学び、伝える必要があると思った。そしていつかもう一度学ぶ場としてタイに戻って来ようと思った。

私は大学への留学は言葉以上の学びを目的とすると考えていたが、最初の大きな問題は言語だった。授業はすべてタイ語で行われる。タイ語は発音が非常に難しい言語であり、日本で一年ほど習っていたタイ語など使い物にならなかった。タイの大学は6月から始まるため3月にタイに渡り、3ヶ月間語学学校に通ったが、それでも大学の授業についていくのは難しく、前期はミクロ、マクロ経済学等、基本的な授業をとり専門用語を覚えることに集中している。

それでもやはりタイ語の講義を受けるのは難しい。クラスは少人数制で、多くても40人ほど。どんどん質問が飛び交うし、先生も聞いていく。タイ語の教科書は英語の翻訳本であることが多いため、英語の教科書を読み、タイ語の教科書で専門用語をピックアップした。ただし一回の授業で進む量が半端なものではない。土日になるとやっと追いつけるとホッとするのだが、未だ満足のいく予習復習ができたことはなく、授業に追いつけたこともない。

こんな中で私がやっていけるのは、友達に恵まれたことだと思う。タイの学生は仲が良い。学部が日本で言うひとつのサークルのような存在なのだ。入学すると、新入生は毎日一人ひとりの先輩に声をかけ、ノートに名前と学籍番号を書いてもらう。その中で自分と同じ学籍番号の先輩を探していく。学籍番号の同じ先輩後輩は、学内での兄弟関係になり、いっしょに勉強したり、相談に乗ったりする。同級生となればもっと仲が良い。私の留学先であるチュラロンコン大学の学生数は学習院とそんなにかわらないと思うが、学部旅行があり、学部パーティーがあり、知らない人はいない。経済学部には英語のコースもあり、外国人学生は多いがタイ語コースにいるのは私一人だった。身近なようで身近でない留学生の存在はタイ人学生にとって難しかったはずだ。それを自然に受け入れてくれたのは、春休みに日本の大学との交換プログラムで学習院を訪れていた学生たちで、友達伝いに輪が広がっていった。外国に来ると、どうしてこんなにさみしがりやなんだろうと思うくらい友達がほしい。「ちえみ～」と笑顔に呼ばれたとき、今でも泣いてしまいそうになるほど、うれしくなる。

生活面でも恵まれたと思っている。通常、留学生は留学生用の寮に滞在することが多いが、私はタイ人学生用の寮にいる。確かに不便なことも多いが、夜遅くまで友達とおしゃべりをしたり、試験前になると凍りつく自習室の空気を体感したり、こればっかりは今ここでしか経験することはできない。

何度もタイ留学には早すぎたと思った。語学力も、経済学の知識も浅かった。特に、チュラロンコン大学はタイで最も有名なエリート校。良くも悪くも、大きなプレッシャーがある。それでも一日も無駄にはできないのがこの一年で、決して後悔できないのもこの一年。本を読んで知識を増やすことならば日本でもできる。でもタイを感じられるのは今しかない。あと、7ヶ月。少し日本が恋しいけれど、学ばなくてはならないことはたくさんある。まだまだ日本には帰れない。

平成17年度
学習院大学海外留学奨学金の募集

本学では、留学費用を援助し、できるだけ多くの皆さんが留学のチャンスを得ることができるように、奨学金制度を設けています。平成１６年度の募集はすでに終了しました。平成１７年度第１回目の募集については、１０月上旬に国際交流センターで配布する募集要項をご覧下さい。

応募条件 ：「留学願」により許可された留学であること。
募集人数 ：１２名
奨学金額 ：１人５０万円（給付）
応募締切 ：１２月初旬の予定

平成１６年度は以下の皆さんが奨学生に選ばれています。

法	・法学科３年	田中　美紀子	（英国）
法	・法学科２年	小竹　美沙	（米国）
法	・政治学科４年	早川　久美子	（英国）
法	・政治学科３年	竹村　彩	（英国）
経　済	・経済学科３年	細川　均	（米国）
文	・哲学科３年	山田　光	（米国）
文	・日本語日本文学科３年	美尾　由乃	（英国）
文	・英米文学科２年	本橋　寛子	（米国）
人文研	・史学専攻Ｄ３年	野本　敬	（中国）
人文研	・史学専攻Ｄ２年	秋山　由加	（英国）
人文研	・史学専攻Ｄ１年	小武海　櫻子	（中国）

（　）内は留学先国

平成16年度大学院学生の
国外における研究発表援助の募集

平成１６年度第２回目の募集を下記のとおり行います。今年度、初めて応募する大学院学生の方だけではなく、すでに援助金を受けている方でも、異なる研究集会で発表を行う場合には応募することができます。募集要項は国際交流センターで配布しています。

応募条件 ：国外における研究集会で発表を行う者
募集人数 ：２名程度
援助金額 ：１人１０万円を限度として渡航費用の一部
または全額
応募締切 ：１１月５日（金）

留学生歌舞伎鑑賞教室

本学では、霞会館のご厚意により、学習院女子大学との共催によって、日本の伝統文化芸能鑑賞の機会を留学生に提供しています。今年度は、総勢８０名ほどの学生が、６月１９日（土）に、国立劇場の歌舞伎鑑賞教室「鳴神」に参加しました。

中村扇雀や中村橋之助など、当代随一の歌舞伎役者によるエネルギッシュな舞台に、一同くぎ付けとなり、中でも客席から叫ぶ屋号に興味津々のようでした。

参加したほとんどの留学生は、歌舞伎に対して「難しくてつまらない」という先入観があったようですが、分りやすくて楽しい解説のお陰で、歌舞伎の魅力を堪能したようです。

夏季タイ・チュラロンコン大学研修旅行が帰ってきました!

昨年は鳥インフルエンザやSARSの影響で中止になっていた「夏季タイ・チュラロンコン大学研修旅行」が帰ってきました！

今夏で４回目となる同研修旅行。今年は経済学部の米山正樹先生にご引率いただき、８名（政治学科５名、史学科１名、日文科１名、心理学科１名）の学生さんがタイへ行ってきました。

今年度は意外にも（!?）チュラロンコン大学での講義やキャンパスツアーが人気でした。タイの経済状況についての講義やタイ語講座は、初めは緊張して臨んだようですが、案外楽しめたようです。また、キャンパスツアーでは、チュラロンコン大学の学生がみんな制服のため、私服姿の集団である参加者達は、注目の的となったようです。同世代のタイ人を身近に感じられる場所ということで、人気があったようです。

反対に、例年好評を博しているゾウ乗り体験は、最初はみんな興奮したようですが、５分も経つと、余りにもゾウがゆっくりなのと、かなり揺れるので、今年度の参加者には不評だったようです。

News Letter vol.14

October 1, 2004

発行日／2004年10月1日
編集・発行／学習院大学国際交流センター

〒171-8588　東京都豊島区目白1-5-1
TEL.03-5992-1024　FAX.03-5992-1025
http://www.gakushuin.ac.jp/univ/cie/index.html

●編集後記●　アジア留学特集、いかがでしたか？折しも今、日本では韓流と呼ばれる韓国文化ブームが続いています。（賛否両論いろいろありますが、個人的には、興味を持つきっかけになるという点で、良いことだと思います。）ドラマを機にハングルを学ぼうと思った学生さんも多いはず。英語だったら、こんなに熱心に取り組めないなぁと思うくらい、一生懸命音読したりしているのではないでしょうか。今さらながら、語学の学習は目的が重要だと気づきました。石塚さんも書いていますね。秋の夜長、あなたは何をして過ごしますか？

[平成16年度国際交流センター運営委員]

所　長	塩谷　清人	（文学部）
運営委員	橋本　陽子	（法学部）
〃	大澤　顯浩	（経済学部・外国語教育研究センター）
〃	前田　直子	（文学部）
〃	荒川　一郎	（理学部）
〃	有川　治男	（教務部長・文学部）
〃	遠藤　久夫	（学生部長・経済学部）